

自然が遺したもの

a2200706 佐々木香

背景と目的

化石は生き物が死んだその状態で何千年、何万年も残っている。すべての生き物が化石として残るのではなく、条件に合ったものだけが残る。初めて恐竜の化石を見たとき、何万年も昔のものが今の時代までのこっている自然の力に感動し、今の時代まで残った化石とはその生き物がその時代に生まれ、生きていた証だと感じた。そして、私も生きてきた証、短大で学んできた証を、化石をモチーフにした作品で遺したいと考えた。

自分が生きてきた証→自分の手で作り上げること

短大で学んできた証→漆の表現を入れること

また、県の展覧会に出展する作品を作った時は初めてのことばかりで、すべてが挑戦だった。そして、新しいことに挑戦することによって作品が完成したときには自分に自信をもつことができた。そのため、卒業研究でもまだ自分がやったことのない「木を彫る」という行為に挑戦し、自分自身の可能性を試したいと思う。

デザイン

恐竜の化石と聞くともう組み立てられている大きな恐竜ばかりをイメージしていたが、夏休み期間中に博物館へ行き、沢山の恐竜の化石を見ているような形の化石があることに驚いた。その中でも一番印象に残ったものが卵の中で化石になってしまった恐竜の赤ちゃんであった。

その化石を見たとき、恐竜の赤ちゃんは大人になる前に死んでしまっても化石として今の時代まで残っているということから、生きてきた証は遺ると考え、遺るという自然の力をそこから感じ取った。そこで卵の中で化石になってしまった赤ちゃんをモデルにし制作しようと考えた。

骨の部分は、栓の木を切り出し造形し、木目を生かすために摺り漆という技法を施す。

卵の部分は、スタイロフォームで原型を作り、その上に漆で布を貼り重ねていく乾漆技法で制作する。卵の外側は錆を使って表現し、内側は色漆を塗り表現していく。

制作工程

骨

1. スケッチ
2. 素材・大きさ決定
3. スケッチに基づき、木を削り出す
(頭蓋骨、背骨、手、腕、足、あばら骨、あご、骨盤)
4. 表面をやすりかけ
5. 摺り漆
(漆を摺り込みツヤをだす)



轆轤で卵の原型制作

卵

1. スタイロフォームの削りだし
 2. 轆轤で卵型に削る
 3. 表面に糊砥の粉を塗る
(スタイロフォームと布をはがれやすくするため)
 4. 布着せ・目摺り (7回)
 5. 固め
(強度を上げるため)
- 卵の外側
6. 錆付け (2回)
(強度を上げるため)
- 卵の内側
7. 追い錆
(凹凸を無くし、面を平らにするため)
 8. 錆付け
 9. 加飾

目摺り後



スタイロフォームをくりぬいた後



最終成果物のスケッチ



頭蓋骨・手



足の骨

考察と感想

恐竜の骨を見るのは好きで自分でもよく見ているつもりだったが、いざ作ってみるとわからないことばかりだった。この作品を作り、沢山の人の見てもらうことによって、少しでも化石に興味を持ってもらえたらと思っていたが、自分自身が改めて化石や骨の仕組み、恐竜の歴史を知ることができ勉強になった。

簡単に木を彫ると決めてしまったが、木はスタイロフォームとは違い、硬く、簡単に付け足すこともできずなかなか思うように進まなく大変な思いをした。また、今回は骨ということもあり細く削る部分が多かったため、思いっきり削るには勇気も力も必要でとても苦戦した。しかし、大変だと言いつつも形が見えるにつれ達成感を味わい楽しんで作ることができ、ものづくりの楽しさ、大変さを再確認することができたと思う。そして、目的でもあった「新しいことに挑戦する」ことによって、今度はこんなことにも挑戦してみたい!と思えるようになったので、これからも作品を作る時だけではなく、何に対しても挑戦する姿勢を持ち続けたい。

自分の手で、ものづくりをしたいとは思っていたが、まさか短大に入りかぶれと戦いながら漆を勉強するとは思ってもみなかった。二年間漆を通して、自分の手で作るものづくりの大変な楽しさを学び、また職人さんの作品に触れ、作り手の話を直接聞くことなど、より深く漆という素材を知ることができた。今ではお店で売られているお椀を見るにしても、さまざまな漆芸作品を見るにしても、この技法はなんだろう?何を表現したかったのだろうか?などと、漆を学ぶ前よりも見方が変わった。そして、作品を作るときも自分はなぜこの作品を作りたいのか、なぜ恐竜なのか?など一つのものに対して深く追求し考えるようになった。私もまだまだ知らないことばかりだが、漆を知らない沢山の人が私の作品を見て、漆ってなんだろう?と少しでも興味を持ってもらえるとうれしいと思う。